論説

「道楽」のススメ
～道路に求められるもう一つの機能～

東京大学 教授　家田　仁（社会基盤学）

道路行政や道路施策が大きな転換点を迎えている。その中には、道路に関わる人たちによる自発的な転換もあれば、世論やマスコミなどからの外圧を契機とした変革もある。実際、事業評価への総合的評価手法の導入、市民参画型の道路計画や道路管理、あるいは最近開始された成果重視型の道路行政スタイルなどが導入されていることは、読者諸兄もよくご存知のとおりだ。筆者もアウトカム指標を用いた道路政策をお手伝いしたり、あるいは本誌にも紹介したことがあるが「道路パフォーマンスマネジメント」手法の導入を提唱しているところである。これらの種々の変革方策のキーワードをまとめるとするならば、顧客の重視、顧客との協働アクティビティ、「投入」よりも「成果」の重視、「作る」よりも「使う」の重視、評価・診断・意思決定の合理化と透明化、といったところだろうか。

そんなわけで、ここのところ道路行政マネジメント手法のシンポジウムなどに参加して話をしたり、行政や民間の道路関係者と意見交換したりすることも少なくない。そうした

路地は人々の生活の場であり、子供たちの遊びの場である。かつて日本でもありふれた風景だった（ベトナム・フエの庶民の町から）

人を集める道路の結節点は、人々の交流と交易の場となった（セネガル・ダカールの市場から）

道そのものがレストランとなるのは世界では当たり前（クロアチア・ドブロブニクの旧市街）

中で、マネジメント改革について感じるところを少々述べよう。

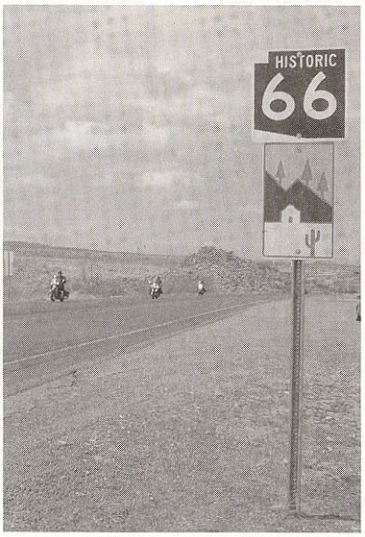
第一は、マネジメントの手法が十分に地に足の着いた即地性・具体性の高いものでなくてはならないことだ。アウトカム指標にしても、現場が「上からやらされている」と感じるようなものでは効果は薄く、むしろ現場が具体的なニーズを上位の意思決定機関に持ち上げる仕組みという側面を強化する必要があることだ。その際に、極力エンジニアリング的な合理的方法論を用いるべきことは言うまでもない。

第二は、従来「道路」というものが暗黙の守備範囲としてきた領域から外側へと極力滲み出し、これまで境界領域として看過されてきた分野の改善にまで射程を拡大し、道路行政のマネジメントを総合化する必要があることだ。沿道の土地利用、景観管理、交通運用の性能評価、踏み切りなど、新たに意識すべき対象は極めて多い。

第三は、これまでともすると連動性や関連性の薄くなりがちな、「道路の整備」と「道路の管理」の業務を仕事の仕組みの上でも、行政の意識の上でも十分に連続的で一体的なものへと転換することだ。このことは、飲み水の供給と並んで、人々の日常生活に最も直結したインフラである「道路」が「顧客」とその利用ニーズに目を向ける上で極めて本質的である。

こういったあたりは、道路マネジメント体系を改善していく中で、今後十分に配慮していただきたいところだ。しかし、マネジメント手法の改善に取り組んでいる実務の方々と接してみて感じたことがもう一つある。国土交通省

道端の露店でショッピングの楽しみ（セネガル・ダカールの旧市街）



シカゴとロサンゼルスを結ぶ66号線（旧道）は、開拓時代以来のアメリカを代表する歴史的街道。テレビ映画にもなった。当時の雰囲気が各所に大事に保存されている

60年代のムードを強調した土産物屋では「66号線グッズ」が売られている（アメリカ・アリゾナ州）

が作った17項目の評価指標にも言えることなのだが、それは「楽しみ」の要素が少なすぎることである。

しかし、道路という空間は、何も物の運送や人の移動などといった経済活動に派生的に生じる輸送のためだけにあるのではない。観光などでは、道路空間にいる時間そのものを楽しめるようにすることが重要であるし、道路の空間そのものが生活やいろいろな遊びを含めた交流活動の空間として充実することも必要である。

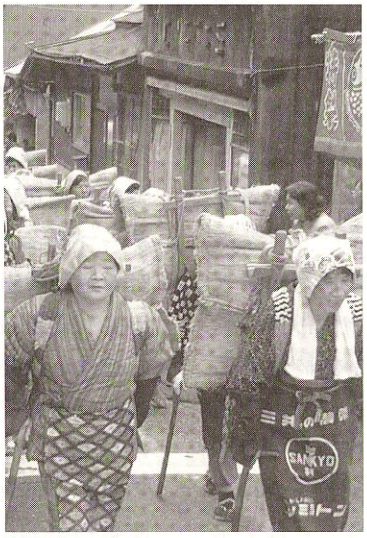
例えば、次のような例が挙げられよう。

- 日常的な交流の場（例：路地などでの子供の遊びや沿道のちょっとしたポケットパークが住民の憩いの空間になっているケース）
- 一時的な商いや飲食の場（例：露店商、各種屋台、オープンカフェ、フリーマーケットなど）
- 祭りや文化の場（例：東北の祭りをはじめ多数、ストリートパフォーマンス）
- 「遊びの移動」の場（例：駅伝やマラソン、自転車レース、歴史的道路のウォーキングイベント、オンロード自動車レース）
- 「美しい移動」の場（例：シーニックルート整備）

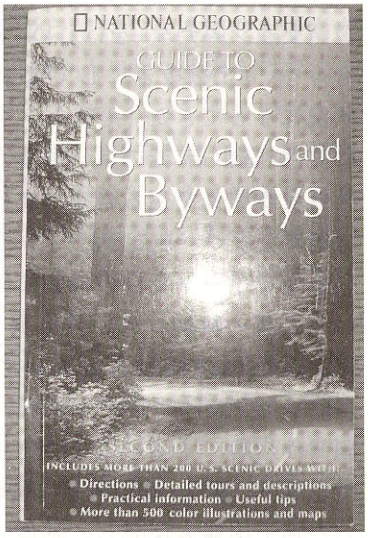
これらをまとめると「道楽」ということになろう。河川の世界は、治水や利水が一定程度進み、顧客である国民の意識が自然志向・環境志向へと転換する中で、「川と親しむ」あるいは「川で遊ぶ」という要素を重視する方向へと大変大きな舵を切っている。

道路は、国民のほぼ全員が毎日１回は使う基礎インフラである。大いに道楽者を育成すべきではないだろうか。

レースは道路を「楽しみ」に使う典型だ。ランナーばかりでなく、応援のバンドも登場（パリのマラソン）



糸魚川から掛川までの350kmはわが国最長の「塩の道」。毎年各地でいろいろなイベントが行われている。写真は佐久間町の塩背負いイベント（静岡県・佐久間町）



景色の美しいルートを指定してロードマップに表示したり、ガイドブックを作ることも楽しい。写真はナショナルジェオグラフィック社のガイドブック（アメリカの例）